

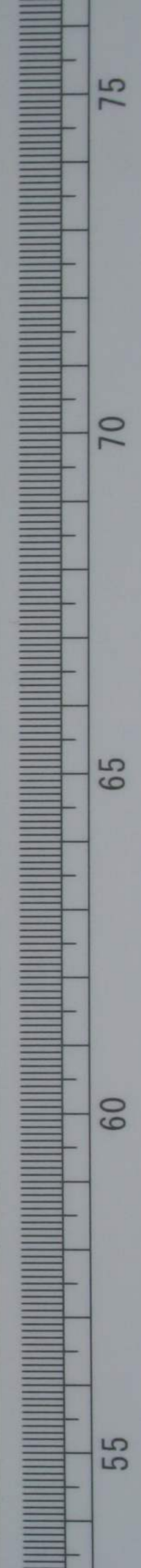
著 櫛 千 泉 古

集 歌 選 自

り と ほ の 川

篇 三 第 書 叢 歌 短 表 代 代 現
幀 装 伯 画 友 恒 田 森

版 社 造 改

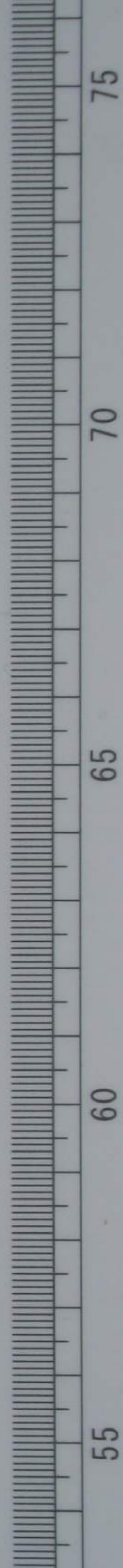
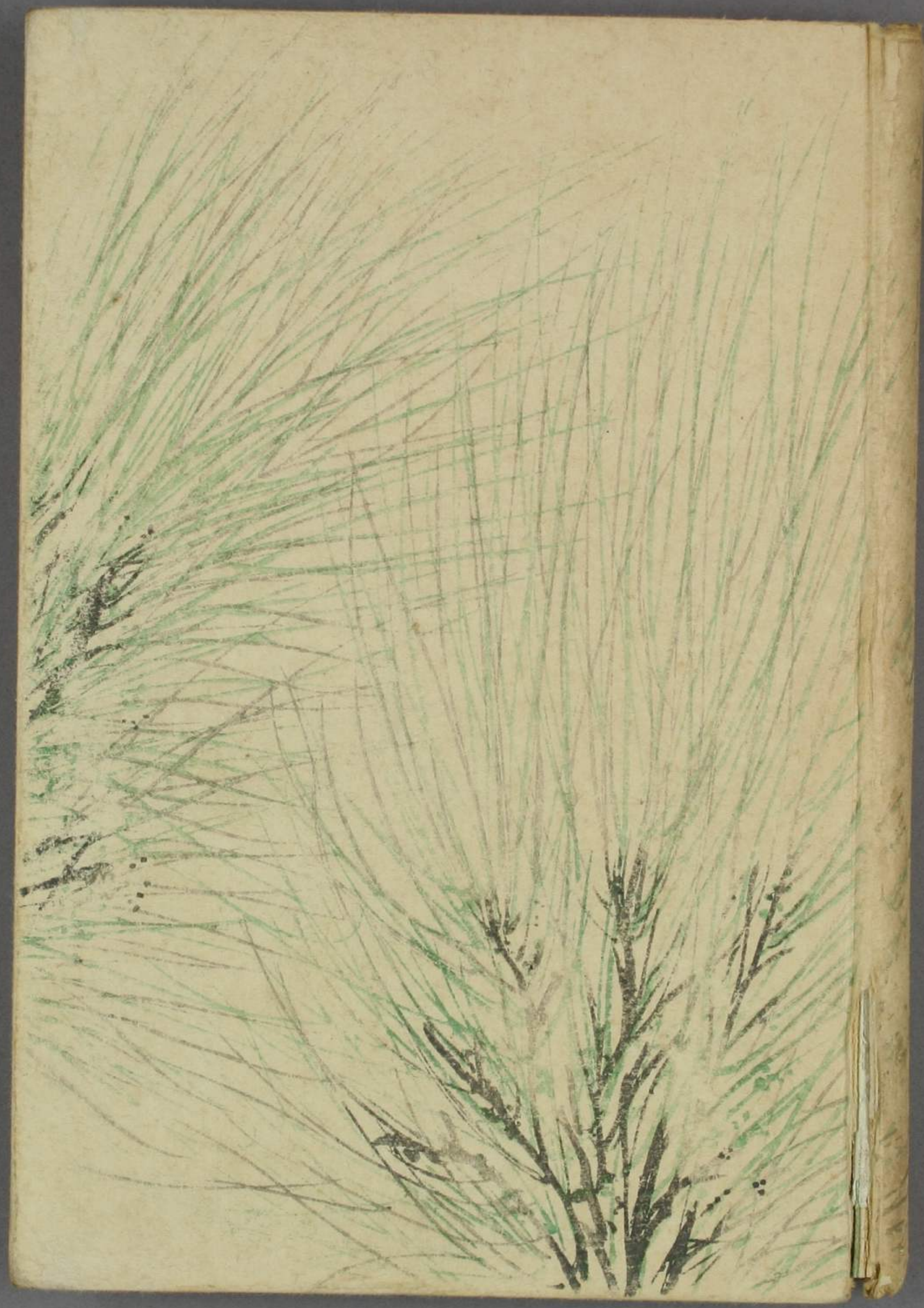
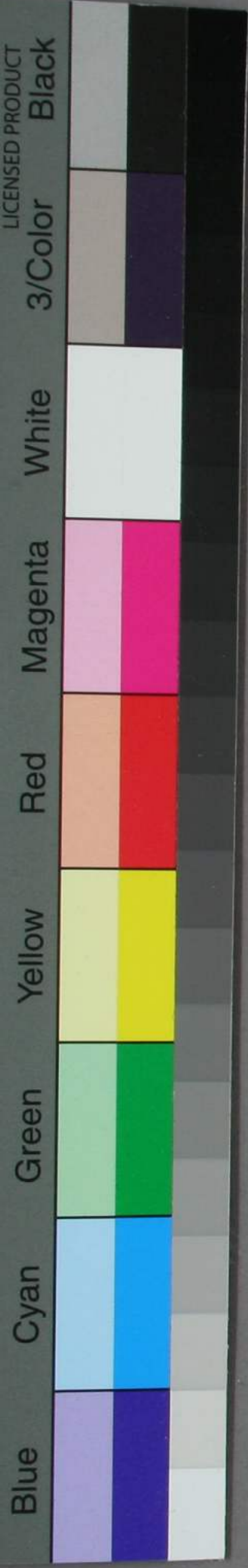


集冠

川のほとり

山泉千尋著



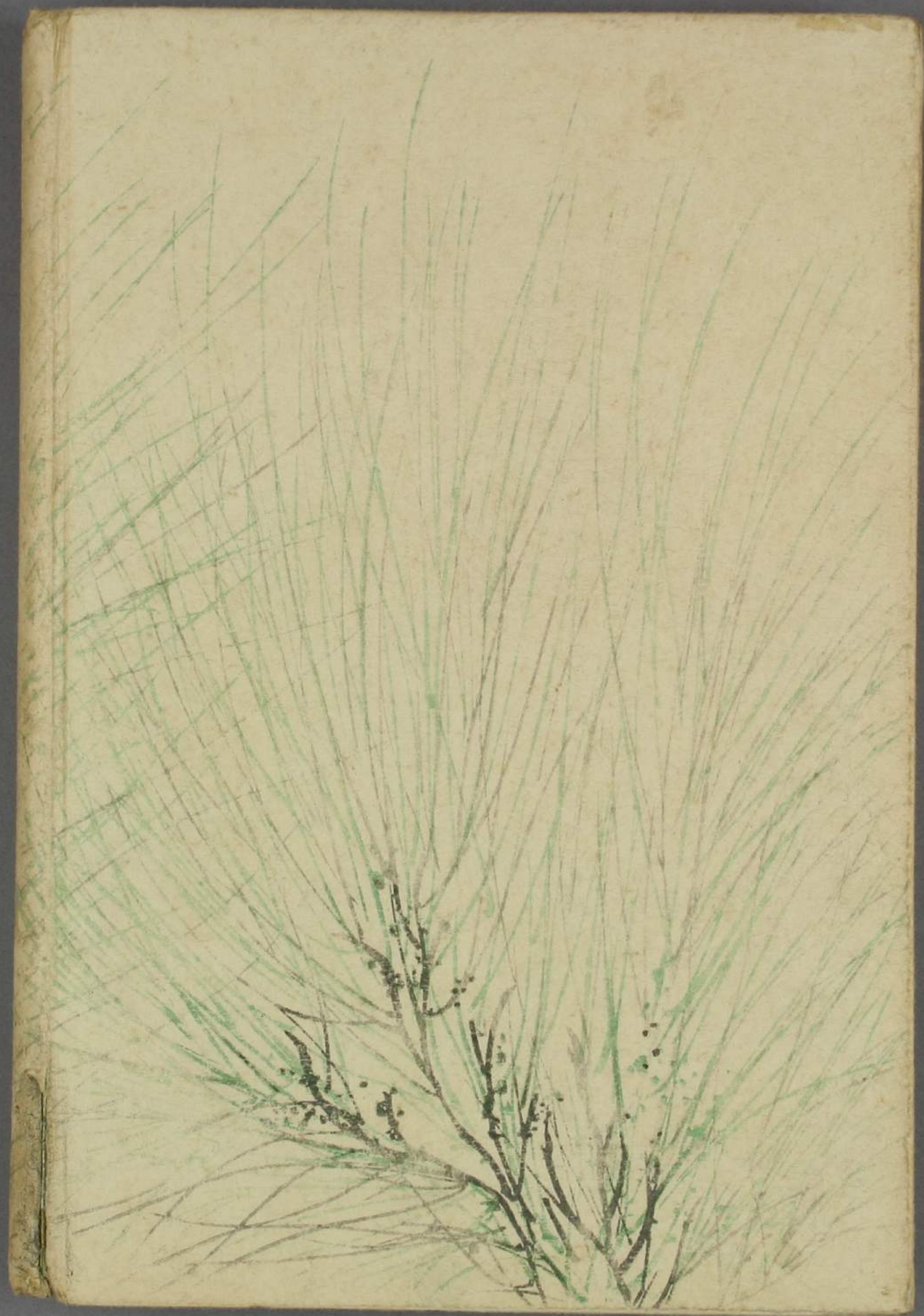


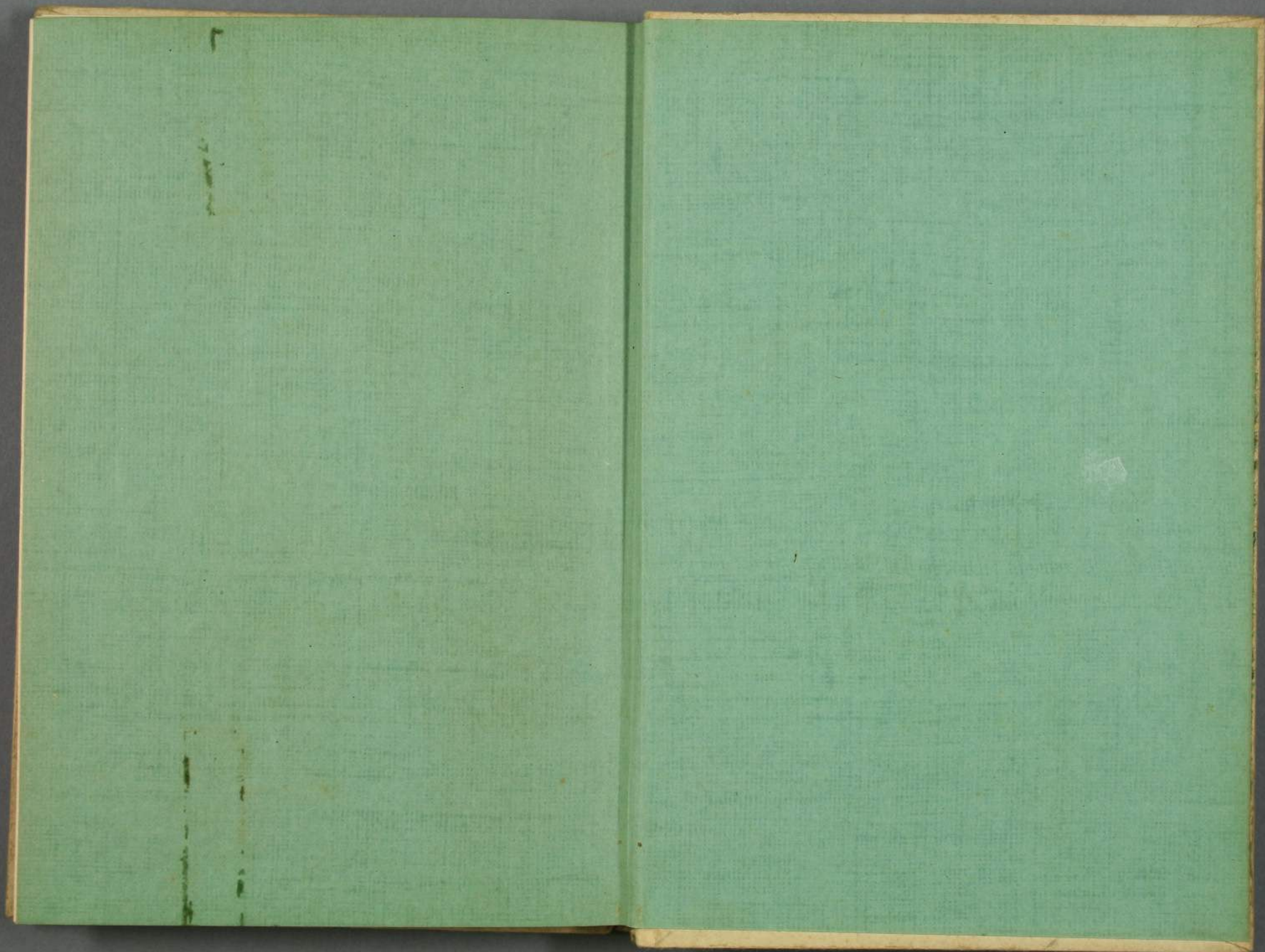
白理
歌集

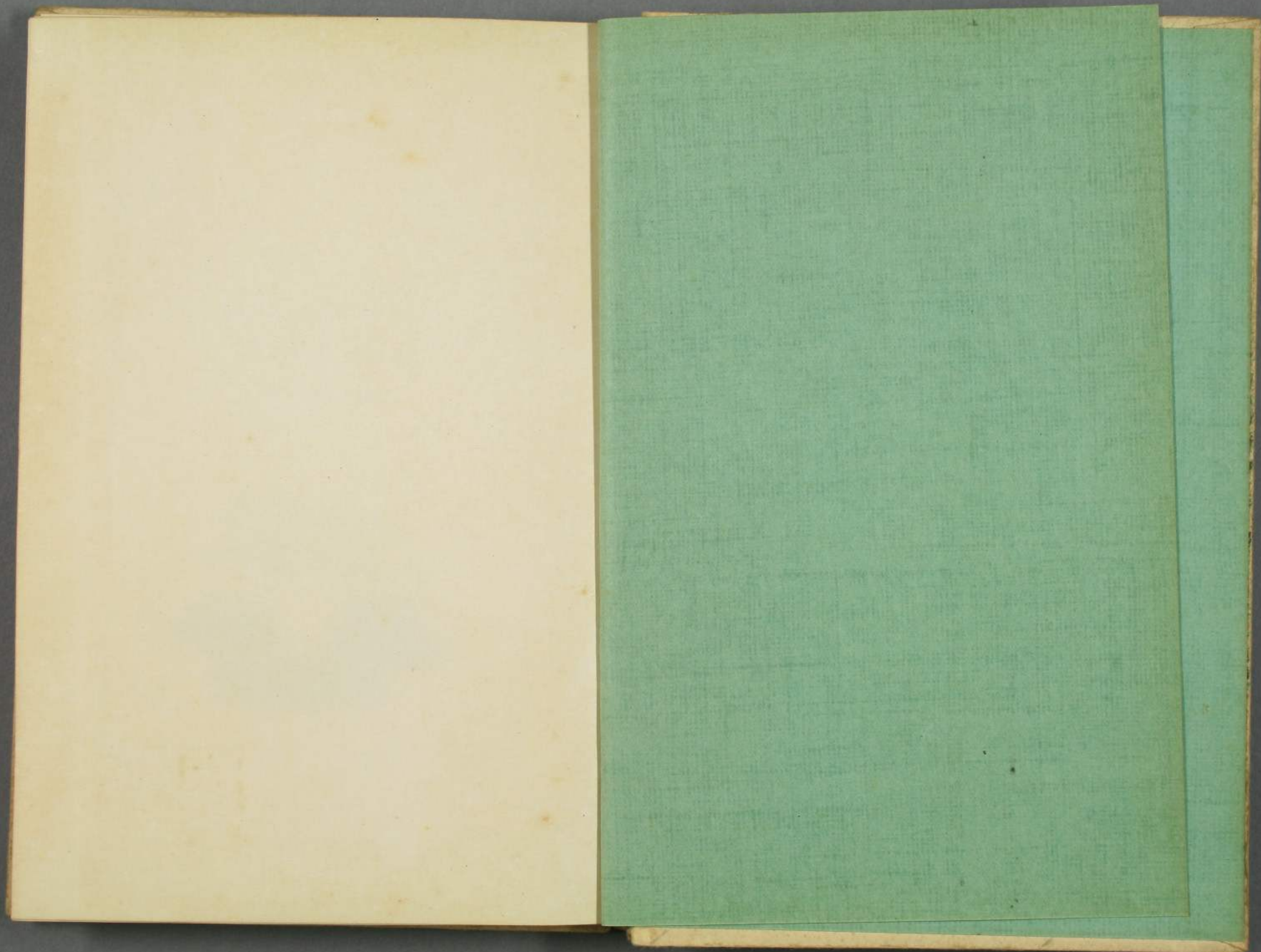
川のほとり

口泉
集

社







自 選 歌 集

川 の ほ と り

古 泉 千 桎 著

改 造 社



川のほとり 目次

草の若葉 (自明治三十七年至明治四十年)

山 焼 (五首).....	三
折にふれて (八首).....	五
朝 露 (二首).....	八
行く春 (八首).....	九
左千夫先生に見ゆ (五首).....	二二
椎の若葉 (二首).....	二四

蟲聲 (五首) 一五

屋上じやうの土つち (自明治四十一年至明治四十五年)

郷を出づ (八首) 一九

鐵橋 (八首) 二三

煙塵 (八首) 二五

住止 (八首) 二八

無一塵庵 (二首) 三二

信濃巖温泉 (五首) 三三

雜詠 (五首) 三四

歸省 (五首) 三六

夕棚雲 (五首) 三八

合歡の花 (五首) 四〇

土 (二首) 四二

こほろぎ (二首) 四三

香取鹿島 (十一首) 四四

野の墓 (二首) 四八

けむり (二首) 四九

南の山 (五首) 五〇

富士登山 (十四首) 五三

柑子かろの花はな (自大正二年至大正五年)

朝 (二首) 五九
瘋癲院 (五首) 六〇
灰 燼 (五首) 六一
燭 影 (五首) 六四
柩を抱きて (十七首) 六六
折にふれて (五首) 七二
桃の花 (五首) 七四
海邊に歸りて (八首) 七六

大川口 (二首) 七九
ひとり寝 (五首) 八〇
飛 燕 (五首) 八二
鶯 (五首) 八四
郊 外 (五首) 八六
雨降る (八首) 八八
五 月 (二首) 九一
紫陽花 (五首) 九三
死にゆく魚 (五首) 九四
鼠 (二首) 九六

青牛集ぎゅうしふ（自大正六年至大正九年）

兒を伴ひて（三十二首）……………九
牛（二十首）……………一〇
轉居（五首）……………一〇
鬼怒川（五首）……………一一
朴の花（二首）……………一一
曇り日（二首）……………一二
動物園（二首）……………一二
暴風雨の跡（五首）……………一三

椎しほの木き（自大正十年至大正十三年）

勝浦（五首）……………一四
向日葵（十七首）……………一五
伊豆（五首）……………一六
山上雷雨（五首）……………一六
父逝く（十四首）……………一七
歸省（五首）……………一八
最上川（八首）……………一九
雉（五首）……………一九

井戸磬 (十七首)	二五二
牡丹 (五首)	二五八
田植 (五首)	二六〇
沼畔雑歌 (十一首)	二六三
左千夫忌 (八首)	二六六
稗の穂 (十一首)	二六九
時雨 (五首)	二七三
焚火 (五首)	二七五

卷末小記

草の若葉

山 焼

見^みえにけるかも
みんなみの嶺^{みね}岡^{おか}山の焼^やくる火^ひのこよひも赤^{あか}く

火^ひのひろがり^がりにけり
夕^{ゆふ}食^け終^をへて外^{そと}に出^でて見^みればあかあかと山^{やま}焼^やけの

夕山ゆふやまの焼やくるあかりに笹ささの葉はの影かげはうつれり
白しろき障さや子こに

山やま火ひ事ことの火ひ影かげおぼろに宵よふけて家いえ居ゐかなしも
妹いもに戀こひひつつ

山やま焼やの火ひかげ明ありてあたたかに曇くもるこの夜よを
わがひとり寝ねむ

折まにふれて

外そと風かぜ呂ろに湯ゆあみし居ゐれば月つき讀よみは山やまの端はいでて
われを照てらせり

草くさひかる見みゆ
このゆふべ野の分わけのかぜの吹ふき立たちて向むかつ草くさ山やま

隣家に風呂によばれてかへるみち薄月ながら
雪ちらつきぬ

寝につきて聞きつつともし降る雪のあまたも
つもるけしきなりけり

春淺み接骨木の芽のふくらみてさ青き見れば
ものの戀ひしも

雨あがり夕日あかるき新湯殿ゆげ立つそとに
梨のはな咲く

にひばりの畑のそら豆はな咲きて檜山がくり
うぐひす鳴くも

砂畑のしき藁のうへにうすみどり西瓜の蔓の
延びのすがしさ

朝露

朝あさな朝あさな牛うしを牽ひき飼かふみちのべのせ小草くさの露つゆの
寒さむきこのごろ

しら露つゆのしとど置おくなべ秋あきの野のの草くさの葉は厚あつく
肥こえにけるかも

行く春

山やま行ゆくとくぬぎの若わか葉は萩はぎ若わか葉は扱くきつつもとな
人ひとわすらえず

まがなしみ人ひとに戀こひつつこの春はるも暮くれてすべ
なし村むらを出いでがてに

草山の奥の澤べにひとり来てなはしろ菜莢を
わが食みにけり

山原のほほけ茅花のうちなびき亂るるが中に
ころぶしにけり

春ふかみ水を張りたる小山田のうすら光りて
日はかたむきぬ

みづひかる春の小山田うち見つつ心はとみに
つつましきかも

都べにいつかも出でむ春ふかみ今日の夕日の
大きく赤しも

ゆふ日さす小川の土手の青芝を素足に踏みて
ひとり歸るも

左千夫先生に見ゆ

むらぎもの心うれしもこの庵にわれは宿りて
朝あけにけり

この庭の槐わか葉のにひみどりにほへる蔭に
われ立ちにけり

よき人にともなはれつつ龜井戸の藤なみの花
わが見つるかも

大きな人のうしろにしたがひて心うれしく
も歩み行くわれは

この庵に幾夜したしくわが宿り今宵もふけて
茶をいただけり

椎の若葉

わが家はいまだは見えぬいちじろく裏の椎森
若葉せる見ゆ

ふるさとに歸れるその夜わが庭の椎の若葉に
月おし照れり

蟲聲

月夜よみ藁をたばねてひとり居る秋の野面の
こほろぎのこゑ

露しろく夕月てりて新藁のほひひやかに
こほろぎ鳴くも

天地に蟲の音すみて五百代の山田もさやに月
押し照れり

蟲の音はいやすみにつつ藁束ね手もと小暗く
月かたぶきぬ

馬の背山山の裾べを霜けぶりさ夜くだちつつ
とほろぎのこゑ

屋上の土

郷を出づ

阜^ふ月^{つき}空^{ぞら}あかるき國^{くに}にありかねて吾^{われ}はも去^いなめ
君^{きみ}のかなしも

背^せ戸^との森^{もり}椎^{しほ}の若^{わか}葉^はにあさ日^ひてりひとり悲^{かな}しも
來^こし方^{かた}おもへば

椎わか葉にほひ光れりかにかくにわれ故郷を
去るべかりけり

君が目を見まくすべなみ五月野の光のなかに
立ちなげくかも

はだしにてひとり歩めりこの國の露けき地を
いつかまた踏まむ

ただ一人わが立ち聞けば草刈のをとこをみな
の歸りくるこゑ

草鞋はきてまなこをあげぬ古家の軒の菖蒲に
露は光れり

家々にさつき幟のひるがへりしかしてひとり
わが去りゆくも

鐵 橋

うちとよむ大きみやこの入口を汽船はしづか
に入りて行くかも

汽船ちかく大き工場見えきたり鐵のほひの
ながれたるかも

たかだかと鐵橋見えてみやこべの大川の口に
船つきにけり

とよみくる都の音のおもおもしはしけの舟に
うつりたり吾れは

船ありてみやこの土を踏みそむるわが足うら
に力のなしも

船にしてわれゑひけらしまひるまの都の土を
ふみつつもとな

ふむ足にこたへあらねば立ちとまり身をとと
のへて息づきにけり

大川の水のおもてを飛ぶつばめ軽きすがたの
まがなしきかも

煙 塵

塵けむるちまたにわれは奔りきぬ君もかなし
く出でてきたらむ

古里を君もたしかに出でたりと思へるものを
いまだ逢はぬに

相見ねば安からなくは何しつゝ君はあるらむ
いまだ逢はぬに

した心君を待ちつゝここにしておどまる電車
八十をかぞへぬ

わが待つやとどまる電車一つごとに人吐きゆ
けど似る人もなし

思ひかね街の辻に立ちるとか行きかく行き
立ちにけるかも

行き違ひにもしもや家に君来しと心さやぎて
いそぎ歸りつ

甕ふかく汲みたる水の垢にござびしき戀も
われはするかも

住 止

あからひく日にむさ立てる向日葵の悲しかり
とも立ちてを行かな

かりそめの病ひをやみてわれ思ふつひに都に
住みえざるかに

醫師がりに行くべきものか夕日さす障子を見つ
つ一人臥るも

青潮に追風うけて走る帆のころは張りつつ
涙ながれぬ

夜まるのまに雨あめふりけらし屋根ぬれて朝明涼しく
秋あきづきにけり

あぼろかに三月は過ぎぬ八十國のきほひどよ
めく都べにして

思ひ湧く大き都にせむすべのたどきを知らに
晝寝するかも

都大路人満ち行けどみち行く人らいささかも
われにかかはりはなし

無一塵庵

暑き日の夕かたまけて草とると土踏むうれし
この庭にして

よき友にたより吾がせむこの庭の野菊の花は
はや咲きにけり

信濃巖温泉

ぬばたまの夜の色ふかくたたなはる群山が上
を風とよもすも

山の湯のともし火見ゆれあらかじめ待たる
ごとく心はをどる

湯の宿のともし見え來し安まりにふりかへり
見つ夜山八重山

蓼科の山の夜の湯にあみ居れば遠くひびかふ
湯の川の音

おのづから満ちあふれをるいで湯のなか岩に
枕きわが身親しも

雑詠

いささかの明地によりて風あぐる子らなつか
しむ今を忘れて

打日さす都の土を踏みそめてとよみしころ
いつか消につつ

霜けぶる谿間の月の下とほみ燈見え來しわが
入らむ里

もやもやし大野のみどり色に立ち黄なるが中
に日の沈む見ゆ

ひとり身の心そぞろに思ひ立ちこの夜梅煮る
さ夜ふけにつつ

歸省

ま晝のあかるき村を歸るにもためらはれぬる
胸のさびしみ

歸りきて坂にわが見るわが家はまだ灯もささ
ず日は暮れたるに

いましてがた田ゆ歸りしと軒間に母が立たすに
わが胸せまる

村ひとら植付前のいそがしくはたらくらしも
わが父母も

かぎろひの日も暮れたらば町のあたり出でて
見まくとひとり思ひつつ

夕棚雲

吾^{わが}からと別^{わか}れを強^しひし心^{こゝろ}もてな^しに寝^ねらえぬ
夜^よ半^{はん}のこほろぎ

ひそひそになくや蟋^{こは}蟀^{らむ}ひそかにはわが鏡^と心^{こゝろ}は
にぶりはてしも

さ夜^よふかくな^くやくほろぎ心^{こゝろ}ぐし人^{ひと}もひそか
にひとり居^ゐるらし

玉^{たま}くしげふたたびあはばをの子^こわが正^{ただ}名^なはあ
らじあらずともよし

かぎろひの夕^{ゆふ}棚^{たな}雲^{ぐも}の心^{こゝろ}ながくな^くながく待^{まち}つべみ
君^{きみ}のいひしを

合歡の花

川限の椎の木かげの合歡の花にほひさゆらぐ
上げ潮の風に

たもとほる夕川のべの合歡の花その葉は今ほ
ねむれるらしも

夕風にねむのきの花さゆれつつ待つ間まがな
しこころそぞろに

夕川の上潮の香のかなしきにこころはもとな
君がおそきに

ねむの花匂ふ川びの夕あかり足音つつましく
あゆみ來らしも

土

夕ゆふかけて 麥むぎ蒔まきを はり 畑はた裾すそに 立たちて ながむる
その 夕ゆふ畑はたを

わが 父ちちも 眺ながめ 居をるらし 麥むぎ蒔まきて 土つちあらたなる
畑はたの 上うへの 月つき

こほろぎ

晝ひるの 野のになくや こほろぎほろほろに 父ちち母ははの 手て
に すがら まくすも

世よに 背そむく かなし 戀こひゆゑ こもりの みなげきすぎ
なむ 吾あれが 一ひと生よは

香取鹿島

雨あがり春の野みちを踏みてゆく草鞋のそこ
のしめりくるかも

春まひる日のかげろひに湖の面はくろく沈み
ぬそのひとときを

夕高き鳥居をいでてうつしきにふりかへり見
る森の暗さを

かへり見る鳥居の奥の夕がすみ木ぬれの空は
いまだあかるし

ゆふがすみうすくつつめるこの丘の社の町に
灯はともりたり

よろづみな闇にただよふ春の夜のま底に深く
湖はしづめり

湖のべのこよひのやどりともしきに春神鳴の
なりわたるなり

春の雷いみじく鳴りてすぎしあと暗き湖べに
われひとり立つ

あらし過ぎて闇おぼほしき春の夜の渚の水に
わが手をひたす

春の夜のあらしは止みぬ水の上の鳥居の雫お
ちてひびくも

朝早み舟こぎいづれ湖かくむ春の國べはいま
だしづけし

野の墓

冬日和野の墓原の赤土のしめりともしみわが
たもとほる

石ひくくならべる墓に冬日てりひとつひとつ
親しくおもほゆ

けむり

ものなべて忘れしごとき小春日の光のなかに
息づきにけり

小春日の林を入れれば落葉焚くにほひ沁みくも
けむりは見えぬ

南の山

あたたかに焼野の土をもたげゐるさわらびの
芽のなつかしきかも

さわらびはいまだのびねば籠もちて土ふかく
掘る山のやけ野に

うすじめりかわさゆく野にわらび芽ぐむ土の
ふくれのわれつつ小さく

草萌えてあかるき山の石の上にもわれも休めり
妹もやすめり

足袋につく焼野の土の灰白にかわさゆくころ
のうらがなしかり

富士登山

ひえびえとさ霧しみふる停車場にわがおり立
ちぬ曉は遠かり

ともし火を消してあゆめば明け近み白く大き
く霧うごく見ゆ

霧はるる木立のうへにうす藍の富士は大きく
夜はあけにけり

山頂にたなびく雲のひとひらは垂氷のごとく
かかりてあるかも

富士の嶺を離りし霧片よりに大戸をなして
そばだてりけり

太陽はすでにたかけれ灰ぐるく片よれる霧の
うごかざるかも

明日のぼる富士の高嶺を仰ぎつつ裾野の湖に
舟こぎあそぶ

富士が嶺を深くつつめる雨雲ゆ雨はふるらし
この夜しづかに

山上は静かならむと雨ながらのぼりゆくかも
このあさあけを

まつはれる雲切れゆきて山頂の輪廓くろく見
えにけるかも

ないそぎそお山は静かなりといふ下山の人の
言のしたしも

むらさきの夕かげふかき富士が嶺の直山膚を
わがのぼり居り

七合目の室のあかりを見すぐしてなほのぼり
行く暮れわたる富士を

あかときの星かがやきてくるぐると富士のい
ただき目の上に見ゆ

柑子の花

朝

あらしのあと木の葉の青の揉まれたるにほひ
かなしも空は晴れつつ

あらしあめ晴れてすがしきこの朝や青栗の香
のあまき匂ひす

瘋癲院

狂女ひとり風呂に入り居り黄色の浴衣まとひ
て静けきものを

ものぐるひの若きをみなご湯につかり静かに
飯を強ひられにけり

窓赤く夕日さしたりぬるま湯に狂女ひとり
幾ときならむ

夕あかりうすら匂へる病室にならびねて居る
狂人の顔

床のうへに三味線ひける狂人の容顔くらく夕
さにけり

灰 燼

うちかぶさる灰燼のなかにわが家は小さく残りてあかりつきたり

灰燼のくらくなびかふ夕庭にたどきも知らに
相見つるかも

夕べ暗く灰燼にほふわが庭にはじめて逢ひし
二人なるかも

ひたぶるに家人は物をしまひ居りかなしき人
は歸りけるかも

放り出せし一切のもの又をさめ焼けざりし家
に眠るなりけり

燭影

湯をいでて夜の廊下のつめたきにふと胸さわ
ぐ君をひとり置ききて

燭の火をきよき指におほひつつ人はゑみけり
その束のまを

夜は深し燭を續ぐとて起きし子のほのかに冷
えし肌のかなしさ

うつつなくねむるおもわも見むものを相歎き
つつ一夜明けにけり

朝なればさやらさやらに君が帯むすぶひびき
のかなしかりけり

柩を抱きて

ふるさとに久^{ひさ}にて歸^{かへ}るかなし兒^この柩^{ひつぎ}いだきて
今^{いま}はも歸^{かへ}る

ぬばたまの夜^よの海^{うみ}走る船^{ふね}の上^{うへ}に白^{しろ}きひつぎを
いだきわが居^をり

しみじみとはじめて吾^わ子^こをいだきたり亡^なきが
らを今^{いま}しみじみ抱^{いだ}きたり

わが膝^{ひざ}に今^{いま}はいだけどたまきはる分^わけし命^{いのち}は
ほろびけるかも

光^{ひかり}りつつたちまち消^きえし流^{なが}れ星^{ほし}あかつきの海^{うみ}
はいまだ暗^{くら}しも

ふるさとの小舟に下りつひえびえと朝明けの
海の香湧きみなぎれり

風出づとかねて思ほえ曉の海をつとうねる波
のかなしき光

山の上に朝あけの光ひらめけりよみがへり來
る命をおもふ

抱きゆく小さき柩にふるさとの朝日ほのぼの
と流らふるなり

しんかんとまひる明るき古家ぬち小さき柩は
今おかれたり

ふるさとにわが一族にいま逢へる汝が死顔の
いまだうつくしも

常磐木に冬日あたたかに小鳥なくわが故郷ぞ
安く眠らな

黄いろなる水仙の花あまた咲きそよりと風は
吹きすぎにけり

ふるさとの日光のなかひやりひやり水仙の葉
を踏みて居りけり

たけたかき棕櫚の木かげは水仙の青きが上は
うつりてゐたり

つつましく寂しきころ厩より牛ひき出でて
庭につなげり

牛の子のまだいとけなき短か角ひそかに撫で
て寂しきものを

折にふれて

嵐あらしのなかにひとり覺さめ居をり病やめる兒この入院にゅういんの
ことを思おもひわが居をり

いつせいに心こころいらちて鳴なく蛙かわれの懶惰らんだの血ち
のなやましさを

さす潮しほのかよふはたての水みづ上に合あ歡わはやさし
くにほひてあらむ

たたなづく稚わか柔な乳ちちのほのぬくみかなしきかも
よみごもりぬらし

飛とぶ蜂はちまきのつばささらめく朝あさの庭にわたまゆら妻つまの
はればれしけれ

桃の花

桃のはな遠に照る野に一人立ちいまは悲しも
安く逢はななくに

との曇る春のくもりに桃のはな遠くれなるの
沈みたる見ゆ

桃の花くれなる曇りにほやかに寂しめる子の
肌のかなしき

桃の花曇りの底にさにづらひわれのころの
あせりてもとな

桃の花くれなる沈むしかすがにをとめのごと
き女なりけり

海邊に歸りて

ま夏日の潮入川の橋のかけ
大き牛立てり水に
つかりて

川なかに立ちて久しきことひ
牛水にぬれたる
尻尾ふりつつ

川口にせまりかがやくあぶら
波音をひそむる
晝のさびしさ

たまきはるいのちうれしくも
ろ手あげうねり
來る波抜きて泳げり

たかだかに寄せくる波を待ち
居つつうねりに
乗りてゆくころかな

素肌なるわが廣胸をたか波のうねりに乗せて
ゆくころかな

ひたひたに波に唇觸りあふむきて遠き雲の根
ゆるぐを見るも

澄みとほる海にひたりて潮ながらとこぶし食
めり岩をかきかき

大川口

大川口夕みち潮のかげふかくひかりふくれて
うねりやまずも

おのづから熱さに倦める波のうねり明く小暗
く暮れがてにけり

ひとり寝

蠟ろうふの火ひをほのかにともしねもごろにわがひとり寝ぬるこの夜よふけつつ

屋根やねすべる露つゆの音ねこそかすかなれ今宵こよひひとり寝ぬのゆかしきものを

蠟ろうふの火ひの焰ほのほゆらげば陰かげのありしみじみとしてひとり寝ぬをする

ほのぼのと若わかき心こころの笑あはまはしく寂さびしければなほゆかしひとり寝ぬ

こほろぎはいとどあまねく鳴なきふけりわがひとり寝ぬの夜半よなのしたしさ

飛燕

喉ぶとの汽笛諸方に鳴れりけり懈さこらへて
朝の飯食む

みしみしと吾兒に蹠を踏ませけり朝起さしな
の懈さ堪へなくに

わりびきの朝の電車にのるところしかすがに
光る夏帽子かな

わりびきの朝の電車にのるところ飛燕鳴くと
も人知るべしや

光のなか圓く大きな瓦斯たんくしづもり立
てりこの街の上

鷺

鷺の群かざかぎりなき鷺のむれ騒然として寂
しきものを — 晝三首 —

雜然と鷺は群れつつおのかじしあなやるせな
き姿なりけり

物おぞく鷺は群れ居り細長き木のことごとくに
鷺の巢の見ゆ

闇ふかく鷺とびわたりたまゆらに影は見えけ
り星の下びに — 夜二首 —

かすかなる星の下びをつぎつぎに飛び行く鷺
の見えつつもとな

郊外

秋の稲田はじめて吾が兒に見せにつつ吾れの
眼に涙たまるも

秋晴るるこの原なかの小さき池子らはひそか
に來り泳げり

兵隊は練兵終へて歸るなりさ霧黄いろく日は
入らむとす

霧こめて夕さにけり代々木原物のにほひの
肌はだに沁しみくも

郊外の町の夜霧に湯屋の灯の火かけあかるし
遠くは照らず

雨降る

雪の上ゆきの上にぬばたまの夜よの雨あめそそぐ代々よ木きが原はら
をもとほる吾われは

調練てんれんのあとすさまじき雪ゆきの野のに雨あめふりそそぐ
宵よひふけにつつ

ぬばたまの夜よの雨あめふり土つちの上うへの雪ゆきしみじみと
溶とけつつあるなり

ぬばたまのよるの雪ゆきはら青白あをしろみ雨あめふりやまぜ
われひとり立たつ

ひとり立たつわが傘かさにふる雨あめの音ね野のにみちひび
く夜よの雨あめのちと

しんとして夜の雨野に立ちゐつつ縦横無礙の
力を感ず

早春の雨の夜ふけて橋わたり水のながるる音
さきにけり

雨滴しみみにぎはしはしけやし寝ぬるを惜し
みさ夜ふけにけり

五月

せいせいと青草のびし濠の土手に朝日かがや
く長き斜面に

さ緑にほへる濠にこのあした小舟三つ見ゆ
藻を採る小舟

紫陽花

體中にしとど汗ばみこころよく空氣のかわく
街をわが行く

まひる日にさいなまれつつ匂ひけりやや赤ば
める紫陽花のはな

炎天のひかり明るき街路樹を馬かじり居り人
はあらなく

日盛りの街樹のかはをかじり居る馬の齒白く
あらはに光る

街頭に馬がかじれるすずかけの木肌か青く晝
のさぶしさ

死に行く魚

眞なつ日のひでりの空の蒸し曇り養魚池の波
ひかり寂しも

汐にがく沸き立つ池の魚のむれ堪へがてぬか
も浮びいでつつ

養魚池のひでりの水のにごり波むれ浮ぶ魚の
うるこの光

ひろびろと夕さざ波の立つなべに死魚かたよ
りて白く光れり

さびしくも夕照る池の水かげに生きゐる魚の
むれ喘ぐ見ゆ

青
牛
集

鼠

大川尻潮涸の泥のくるぐると熱きにほひて晝
たけにけり

眞夏日のひき潮どきの泥の上にあなけうとく
も群れゐる鼠

兒を伴ひて

ここにこゝにしてこゝ俾まゐらねばよ夜道よみちかけわれとわがこ見
とか徒歩ちほ行ゆかむとす

この國くにの冬ふゆ日ひあたたかし然しかれどもかの山やまかけ
はすでにかげれり

山峽に道入らむとすかへり見れば海きららかに
午後日照れり

わが兒よ父がうまれしこの國の海のひかりを
しまし立ち見よ

ゆく道は夕づきにけり日のてれる山のいただ
き見つつ悲しも

五百重山夕かげりきて道寒ししくしくと子は
泣きいでにけり

さらさらと水の音する山あひに道は入りつつ
夕寒きかも

をさな兒の手をとり歩む道のへにみそさざい
飛び日は暮れむとす

この道に連になりたる山人が手にさげてゐる
雉子の尾ながし

連れだちし人はわかれぬ夕さむく風明りする
山あひの道に

荷車に吾兒のせくれし山人もこの小みちに
別れむとすも

山の上に月はいでたりわが兒よ父と手をと
り
また徒歩ゆかむ

山の上に月はいでたり汝が知れるかのよき歌
をうたひつつ行かむ

あたたかく朝日ながらふ枯草の丘びのみちを
わがあゆみ居り

この丘の緩くのびたる裾のべを父とわが兒と
あゆみくる見ゆ

祖父にはじめて逢ひて甘えぬわが兒の聲の
ここにきこゆる

群れゐつつ鴨なけりほろほろとせんだんの實
のこぼれけるかも

麥畑を來つともしもわが家の白き障子に日
の照る見れば

古里のここに眠れる吾兒が墓にその子の姉と
いままうでたり

ふる里の真晝の光しづかなりをんなこどもの
聲きこえつつ

日の光あまねく満てり山の上に細く立ちたる
煙は消えず

わが村の午鐘のおときこゆなり一人庭にゐて
聴きにけるかも

ふるさとに二夜眠れるこのあした雨しとしと
とふりいでにけり

大きな藁ぶき屋根にふる雨のしづくの音の
よろしかりけり

のびのびと朝の縁に立ち門畑の麥の芽にふる
雨を見にけり

搾乳手きたれるからに幼な吾兒からかささし
て厩に行くも

ふる里の雨しづかなり母も吾も悲しきことは
今日はかたらず

斯くしつゝ幾日とどまるわれならむ麥の芽ぬ
らす雨の静けさ

風吹きて海かがやけりふるさとに七夜は寝ね
て今日去らむとす

馬車おりて吾兒の手をとり歩みけり沖つ風吹
く崖の上の道

崖たかみ外洋青く晴れわたりさうさうとして
風吹きやまず

いくほどをわれら歩みしあをあをと潮騒光る
崖の上の道

牛

老おいませる父ちちに寄よりそひあかねさす晝ひらの厩うまに
牛うしを見みて居ゐり

父ちちの面おもてわゆたに足あしらへり冬ふゆながら二に頭こぶしの牛うしの
毛け並ならよるしき

日ひおもてに牛うしひきいでて繫つなぎたりこの鼻はな繩なはの
堅かたき手てざはり

乳ち牛うしの體たいのとがりのおのづからいつくしくし
てあはれなりけり

さ庭にわべに繫つなげる牛うしの寝ねたる音ねおほどかにひび
く晝ひらふけにけり

冬日ふゆひさす大おほきうまやにほし草くさのさ青あおのにほひ
なつかしきかな

牛うし久ひさしく寝ねてゐたるあとの庭にわ土つちの匂におひかなし
も夕ゆふ日ひてりつつ

夕ゆふ寒さむみ竈かまどにひとり火ひを焚たきて牛うしの湯ゆを沸わかす
その牛うしの湯ゆを

夕ゆふ寒さむみ牛うしに飲のまする桶かじの湯ゆに味あじ噌そうをまぜつつ
手てにかきまはす

菜な萸むの葉はの白しろくひかれる渚なぎさみち牛うしひとつゐて
海うみに向むかひ立たつ

ふるさとの春はるの夕ゆふべのなぎさみち牛うしゐて牛うしの
匂におひかなしも

夕日^{ゆふひ}てる笹^{ささ}生^{なま}がなかゆ子^こ牛^{うし}いで乳^{ちち}のまむとす
親^{おや}牛^{うし}はうごかず

夕^{ゆふ}なぎさ子^こ牛^{うし}に乳^{ちち}をのませ居^ゐる牛^{うし}の額^{ぬか}のかが
やけるかも

入^いりつ日^ひの名^な残^{ごり}さびしく海^{うみ}に照^てりこの牛^{うし}ひき
に人^{ひと}いまだ來^こず

草^{くさ}原^{はら}につなげる牛^{うし}を牽^ひきに行く日^ひのくれ方^{かた}の
ひとり寂^{さび}しき

夕^{ゆふ}ぐれの浅^{あさ}川^{がは}わたる牛^{うし}の足^{あし}音^ねさびしみにつつ
鼻^{はな}綱^{づな}をひく

厩^{まふ}内^{うち}に入るるただちに大^{おほ}き牛^{うし}ふりかへりきて
首^{くび}のばしたり

牛うし入れて夕ゆふのうまやにわがあれば牛うしの水みづ持もち
父ちちの來きませる

牛うしひきて下くだらむとする坂さかの上うへゆふ日に照てらふ
黒くろ牛うしのすがた

かぎろひの夕ゆふ日ひ背せにしてあゆみくる牛うしの眼まなこの
暗くらく寂さびしも

轉
居

移うつるべき家いへをもとめてきさらぎの埃はこりあみつつ
妻つまとあゆめり

けならべて街まちのくまぐま歩あけども小ちさきよき
家いへありといはななくに

きさらぎのあかるき街をならび行き老いづく
妻を見るが寂しさ

士ぼこり白く被ける街ばかり目には見えつつ
ただに疲れぬ

いくたびか家は移れる崖したの長屋がうちに
今日は移れる

鬼怒川

藪かげゆ小舟にのりて水たぎつ鬼怒川わたり
ぬ春の寒さに

ゆきゆくと川の堤のいぼたの芽白くひかりて
雨はれにけり

道入みちいれる雑木林ざつぼりんにひともとの辛夷しんい白花はくわにほひ
てありけり

ここに來きて君きみが命いのちをなげくだにわが身みともし
く思おもはざらめや

もの問とへどことばすくなき村むらの娘むすめと夕ゆふの長橋ながはし
わたりけるかも

朴の花

ゆく水みづのすべて過ぎぬと思おもひつつあはれふた
たび相見あひまつるかも

はかなかる逢あひなりながらほのぼのとなごり
こひしき朴はくの木きの花はな

曇り日

曇り日の若葉やすらかに明るかり墓地を通り
て湯に行くわれは

ひそかごと持つとはいはじ曇り日の若葉明る
く親しきものを

動物園

ま夏日の動物園にきたりけり鳥けだものも寂
しく立ちゐる

白日のひかりまがなし 梟はまなこみひらき
土に立ちゐる

暴風雨の跡

ゆく道に倒れ木いよよ多くして外海白く見え
にけるかも

大木の根こぎたふれし道のべにすがれて赤き
曼珠沙華の花

潜きして今し出で來し盃をとめ顔をふきつつ
焚火にあたる

かくのごと荒れたる海にまた直に命したしみ
いさりするかも

暁深く潮さしくれば打ち出でて網よするらし
あまのよび聲

勝 浦

三方に海たたへゐる岬のみちわがひとり行く
このあさあけを

さわやかに朝かぜ吹きて港の家海に向きたる
窓ひらく見ゆ

あさぼらけ港のひとら水汲むとこの寺の井に
あつまり来るも

朝はやみかき金はづし蓋とれば水にほやかに
井にたたへゐる

潮ひきて赤くあらはるる岬の脚さ月の晝の日
にかがやけり

向日葵

日ひざかりのちまたを歸かへるひもじけど勤とめを終ま
へてただちに歸かへる

晝ひるふかくま日照ひりつくる大通おほどほりただに静しづけし
吾われはあゆむに

深ふか川がはの八はち幡ばんのまつり延のびけらし街まちのかざりを
取とりぬる眞ま晝ひる

米こめたかき騒さわぎひろがれりこの街まちの祭まつりにはかに
延のびにけるかも

祭まつりのびし街まちのまひるのものゆゆし大おほき家いえ々々
もて戸とざせる

この街の祭のびけりそろひ衣きたる子どもの
群れつつ寂し

日のさかりこの川口に満ちみつる潮のひかり
に眼をあき歩む

まひるの潮満ちころぐし川口の橋のたもと
の日まはりの花

大きな葎くろぐろと立てりけりま日にそむ
ける日まはりの花

大きな花ならび立てども日まはりや疲れにぶり
てみな日に向かず

満ちみつる潮のひかりのいらだたしまひるの
長橋わがわたり行く

秋あきづきて暑あつさまひるの地ち上じやうのもの緑きはなべて
老おいたるらしも

異い國こく米まいたべむとはすれ病やみあとのからだかよ
わき兒こらを思おもへり

炎えん天てんにあゆみ歸かれりやすらかなる妻つま子の顔かほを
見みればかなしも

疲つかれやすき心こころはもとな日ひまはりの大おほきくる葦あし
眼めに仰あやぎ見みる

牛うしの肉にくのよき肉にく買かひて甘あまらに煮に子こらとたうべ
む心こころだらひに

な病やみそまづしかりともわが妻つま子こ米まいの飯いひたべ
ただにすこやかに

伊豆

梅雨の雲白くおりゐて見の親し船の舳むかふ
真鶴岬

さみだれのあめふりけぶり朝はやし白き海鳥
庭に来て居り

晝ふかみさみだれやまざひとり来ていで湯の
湯槽汲みかへにけり

くみかへし湯ぶねのいで湯やゝやゝに湛ふを
待てりはだかながらに

夕ちかみ梅雨明けして湯の村の人ごゑ物の音
しづかにきこゆ

山上雷雨

眺めぬる九十九谷にいくすぢの夕けのけむり
立ちにけるかも

山の町夕冷えはやしをみな子になひ行く水
みちに垂りつつ

あらし雲おほへる底よりくるぐるとむらがり
きたる夕鴉かも

忙しなくあとよりあとより夕鴉むれ歸りつつ
おほへる黒雲

あらし雲山をおほへり群れかへる黒きからす
のおもたき羽音

父逝く

かくのみにありけるものをみもとべに去年も
今年もわれ歸らざりし

遠くゐて悔いざらめやもちちのみの父のいの
ちの何ぞすみやけき

うつそみの吾兒の手をとり雨しぶくこの闇の
なかにわれ立ちにけり

ふるさとに父のいのちはあらなくに道に一夜
をやどりつるかも

闇をゆする浪のとどろきとどとしてわが胸痛
し夜いまだ深し

雨ながらこれの峠にきたりけりわが村かたは
霧ただに白し

かへり来てわが家の屋根見ゆらくに涙あふれ
てとどめかねつも

土ふかく父の柩ををさめまつりわがおとした
る土くれの音

山へゆく村の小みちのいちじるくよくなれる
だに父のしぬばゆ

村の山木高く繁くなりけり父のはたらきし
あとにやはあらぬ

おのがじし生くる命をうべなひて遠くあそべ
るわれらをゆるしし

わくらばにわれら肉親あひ寄りて幾日は過ぎぬ
父あらぬ家に

わが母の今日はお出で立ち茶を摘むにわれもわ
が兒も出でて摘みつつ

まかがよふ光のなかにわがうから今日は相寄
り茶を摘みにけり

椎
の
木

歸省

このねぬる朝あさの郷さとわのあかるかり人々ひとすでに
働はたらくらしも

朝日あさひのおそく影かげさすわが家の屋根やねながめ居をり
このあさあけに

このいへを繼ぐ弟のかへるまで保ちかあらむ
古き茅屋根

走りつつ仔牛あそべり母ひとりこの家もりて
働きています

わくらばに吾れも弟もかへり來てこの古家に
男の聲す

最上川

あかときと夜は明けきつつ大さ谿の川瀬のた
ぎち遠白く見ゆ

梅雨ばれのあかとき靄の立ちうごく峠の驛に
顔あらふかも

あかときの峠の驛に水のめり越え來し山山靄
こめむとす

青田のなかをたぎちながるる最上川齋藤茂吉
この國に生れし

梅雨ばれの光りのなかを最上川濁りうづまき
海にいづるかも

この海の沖のすなどりをわが見むと最上川口
舟出するかも

さみだれの最上くだりけむ大き鯉海に喘ぐを
手に捕へたり

海の上のうちいでて見れば雪ひかる鳥海山に
日はまとも照れり

雉

うちひびきかなしく徹る雉の聲みな此而むき
て鳴くにしあるらし

あからひく朝靄はるる土手の上に雉子光りて
見えにけるかも

おのがじし己妻つれて朝雉のきほひとよもす
聲のかなしさ

高處にし雄雉は鳴けり草わけてあゆむ雌雉の
静かなりけり

さ青なる露の丸葉に尾を觸りて雉子しまらく
うごかざりけり

井戸替

わが家の古井のうへの
大きな椿かぐろにひかり
梅雨はれにけり

つゆ晴れて朝日あかるし
今日しもよこのわが
家の井戸拂ひせむ

父ゆきて年は経にけり
家の井戸この梅雨時に
あまた濁れる

井戸拂ひすらくともしも
一柄杓まづ汲みあげ
てくちすすぐかも

年ながく拂はぬ井戸の
梅雨濁り匂ひさびたる
水になりにけり

太幹たいかんの椿つばきの根ねの青苔あをこけもさやにあらひて井戸いど
は晒ひすも

汲くみおける盥うの水みづにはなちけり飲のみ井戸いどの鮎あせの
光ひかりいみじき

水垢みづかの匂におひまがなし汲くみ汲くみて井戸いどの底そこひに
あり立たちにけり

素足すそにて井戸いどの底そこひの水踏みめり清し水みづつめたく
湧わきてくるかも

まさやかに古井ふるいの底そこを洗あひけり湧わきていでく
る水みづのかそけさ

一ひとすぢに椿つばきがもとゆこの井戸いどの水みづは湧わきいづ
音ねながらに

飲井戸の水替へにけりひとりして家守る母の
まささくありこそ

風呂をいでて心こほしみ酒し井にたまらふ水
を見に行きにけり

替へたての井戸の香寒しやゝやゝにたまらふ
水の上べ澄みつつ

山のうへに入日あかあかとかがやけり今日の
日ながく思ほゆるかも

山のうへに入日あかあかとかがやけりわが祖
たちは健かにありし

昨日の日に替へし井戸水中つべはかつ泡立ち
てうすく濁れり

牡丹

くれなるの尺ばかりなる牡丹の花このわが室
にありと思へや

大輪の牡丹かがやけり思ひ切りてこれを求め
たる妻のよろしさ

瓶の中に紅き牡丹の花いちりん妻がまごりの
何ぞうれしき

うつし身のわが病みてより幾日へし牡丹の花
の照りのゆたかさ

まづしくて老いたる妻が心よりこの大き牡丹
もとめけらしも

田 植

これの田を植うるにしあらし畦の上に早少女
ならべり十五六人

おり立ちてこの大ぜいのよろしもよ原の大田
を今日植うるかも

うちならび植うる人らのうしろよりさざなみ
よする小田のさざ波

下の田に今うつりたる早少女ら小笠はとりて
すずしかるらし

ねもごろに二足三足ふみ入りて浮き早苗さす
妹がすがたや

沼畔雑歌

梅雨はれて夕空ひろしここに
見る筑波の山の
大きかりけり

蘆原のあしの葉ずゑの夕あかりよしきり
飛び
て光りつつ見ゆ

分け入りていくら歩みし夕あかりいよよかす
けき高草の原

夕ふかき高草のなかに歩み入りり頭のうへを
驚の飛ぶ音

高草原あゆみかへせば西あかりまなこに沁み
ていよよ暗しも

草原をあゆみきたりて湯に入れり草傷さへに
にくからなくに

夕されば馬の親子はかへり居り蚊遣してやる
その厩べを

夕ふかしうまやの蚊遣燃え立ちて親子の馬の
顔あかく見ゆ

おぼほしく厩をおほふ蚊遣火のけぶりは靡く
夕沼のうへに

朝早み鳥屋を出でたる鳥のむれ鶯鳥はすぐに
堀におりゆく

朝あけの堀におりたる鶯鳥のむれ眞菰の葉を
ばしきり折り啖む

左千夫忌

病^びめる身^みを静^{しず}かに持^もちて龜井戸^{かめいど}のみ墓^{はか}のもと
にひとり來^きにけり

さながらにおのれみづからをいだしけむ大^{おほ}き
命^{いのち}しおもほゆるかも

つねにつねになまけてありしいまにしてわが
健康^{けんこう}はおとろへにけり

去^さりがてにこのおくつきに手^てをかけて吾^{われ}は立^た
ち居^ゐりひとりなりけり

なき人^{ひと}のふかき命^{いのち}をおもふ時^{とき}われはわが身^みを
愛^{あい}しまざらめや

よき友はかにもかくにも言絶えて別れぬてだ
によるしきものを

み墓べの今朝の静けさひとりゐるわれの心は
定まりにけり

み墓べに今日はまゐりぬ龜井戸の葛餅買ひて
歸り來にけり

稗の穂

いきのをに息ざし静めこの幾日ひた仰向きに
寝ね居る吾れを

ひたごころ静かになりていねて居りあるそか
にせし命なりけり

妻はいま家に居ぬらし晝深くひとり目ざめて
寝汗をふくも

おもてにて遊ぶ子供の聲きけば夕かたまけて
すずしかるらし

うつし世のはかなしごとにはほればれと遊びし
ことも過ぎにけらしも

うつし身は果無きものか横向きになりて寝ぬ
らく今日のうれしさ

秋空は晴れわたりたりいささかも頭もたげて
わが見つるかも

秋さびしもののもしさひと本の野稗の垂穂
瓶にさしたり

秋あきの空そらふかみゆくらし瓶かみにさす草くさ稗ひえの穂ほのさ
びたる見みれば

うつたへに心こころに沁しみぬふるさとの秋あきの青あをぞら
目めにうかびつつ

充みちわたる空そらの青あをさを思おもひつつかすかにわれ
はねむりけらしも

時 雨

小夜さよ時とき雨あめふりくる音ねのかそけくもわれふる里さと
に住すみつくらむか

この頃ころのあかとき露つゆに門かど畑はたの蕎そば麥ばの白しろ花はなかつ
黒くろみけり

めづらしきけさの朝けやうつそ身のすこやか
にして妻の戀しき

はるばると來れる友かわが家のらんぶの下に
見らくともしも

わが家の門の小みちにこのあした遊べる友を
われは見て居り

焚 火

秋晴れの長狭のさくの遠ひらけひむがしの海
よく見ゆるなり

秋晴るこの山の上に一人ゐて松葉かきつめ
火を焚きにけり

この山の峽の小田に稲刈るはたれにかあらむ
わが村の人

山の上やまのうへにひとり焚火たきびしてあたり居り手をかさ
しつつ吾が手を見みるも

ひとり親したしく焚火たきびして居り火のなかに松毬まつかきが
見ゆ燃ゆる松かさ

巻末小記

この歌集には、明治三十七年わたくしが十九歳の時より大正十三年三十九歳に到る、二十一年間の作の中から四百三十二首を選んで收めた。わたくしはまだ一冊の歌集をも世に出して居ない。それゆゑ昨年の秋改造社からこの選集の話があつた時にはおことわりしたのであつた。そしてなるべく早くまとまつた歌集を出したいと思つた。十月の初め、病骨を養ふために郷里安房の山中に歸ることになつたので、病のひまひまに歌稿を整理したいと思つて居た。ところが、久しぶりに接した郷里の秋は、自分にたゞ親しくて、毎日家のまはりの小道や近い山のあたりを

ぶら／＼散歩して、疲れ／＼ば晝寝をして、ひと月ほど居る間に何にもしな
かった。持つて行つた歌稿の包みもそのまま遂に解かずにしまつた。

わたくしは幾分の健康を恢復して十一月東京に歸つた。十二月になつ
てわたくしのからだはまた悪くなつた。殊に十二月二十六日から仰
臥したまゝ、絶對安静を保つて居らねばならぬやうになつた。さういふ
状態のまゝでこの大正十四年を迎へた。そこへ改造社からまた選集の
ことをすゝめられた。今度はこれを引受けた。わたくしもまさかになら
う急に死にもしまいと思つてゐたが、とにかくかう病氣がよくなって
は、まとも**つな歌集をを出すのは**容易なことではないと思つたからである。
わたくしは**床の中に居ながら**昔からの自分の歌を思つて見た。かう

いふ歌を詠んだら、いふ歌を作つと、歌は覺えて居なくともその題目
だけを思ひ出してはそれを妻や子供に書きつけて貰つて目安を作つて
見た。そしてそれだけで大體豫定の歌數三百五十首位になると思つた。
二月になつてから少しづゝ起きて居られるやうになつた。わたくし
は毎日一二時間づゝ机に向つて、さきに病床の中で作つた目安がきをも
とにして自分の歌を年代順に選んで見た。初め五首位採れると思つた
のが三首しか採れなかつたり、八首採れると思つたのが四首しか採れな
かつたり、或は全く採れさうがなかつたりした。時には又自分の歩いて
來た經路を知るために選んでおきたいやうな歌が出て來たりした。そ
れから歌稿がまとも持つて居ないために、採りたいと思つた歌が見付から

ないのもかなりあつた。なか／＼思ふやうに抄取らず、机に向つたまゝ一首もよう書きえずに、空しく疲れて過す日も多かつた。近年の歌になるに従つて選ぶのはらくであつた。いゝ歌はなくとも、今の自分に採れる歌が多くなつたのである。初めに全體の歌を一通り見て、最近の歌から選り始め、それを多く採るやうにすれば、らくに早く出來たものを、歌稿が不完全なのと病氣の身の骨惜しみとで、古いのからぼつ／＼見て行つた爲めに意外に骨が折れたのである。しかし古い歌を割合に多く採つたことが却つて面白いかも知れないと思ふ。全部選り終つたのはもう三月の末であつた。予定の歌數よりも大部多くなつたが、また取捨するのが面倒なためのもゝにした。

わたくしは一冊の歌集をも世に出さないのに、其時代々々に歌集の名だけを秘かに付けておいた。「草の若葉」「屋上の土」「柑子の花」「青牛集」「椎の木」がそれである。今この選集には世に出ないその五つの歌集の名の下に作歌の時代を大別しておいた。

「草の若葉」は最も初期のものである。わたくしが、三十一字を並べたに過ぎぬものではあつたが、ともかくも歌は作りはじめたのは、明治三十一年ごろのことである。雑誌「馬酔木」にはじめて歌を投じて、伊藤左千夫先生に見て貰つたのは明治三十七年の夏である。先生は「二十首中十二首を録す云々」といつて、特に誌上でわたくしを激勵してくれた。その歌の

中からはこの選集に採つてないのではじめの方の歌を三首舉げて見る。

若草のつまぐるよこばひいざなふと山田の神は燈火てらす

短冊の苗代小田に綱もちて立てる少女は蟲捕るらしも

山畑に藍らゑ居ればいなさ吹き雨雲いでぬふりいでんとや

先生にはじめてお目にかゝつたのは、明治四十年の五月であつた。それまでも毎年一度ぐらゐは上京したのであるが、田舎ものゝはにかみやであつたわたくしはよう訪ねて行けなかつたのである。お目にかゝつて見れば、たゞ親父に逢うた氣持であつた。先生のお宅へ幾晩も泊めて貰つた。その時長塚節氏、蕨眞氏、石原純氏などにもお逢ひした。「草の若葉」にはわたくしが先生にはじめて歌を見て貰つた年から、先生にはじめ

てお逢ひした年までの四年間の作のうち三十五首を採つた。わたくしは歌集を出す時はこれらの初期の歌は皆捨てるつもりで居たが、この選集を作ることになつて、何だか古い時代の歌もなつかしくなりこれだけ選んだのである。

「屋上の土」時代は歌を作ることにも最も苦しんだ時であつたと思ふ。明治四十一年の六月初め、舊暦の五月の節句のころであつた、わたくしは愈々郷里を出て東京生活をする事になつた。東京へ出てからは殆ど毎日のやうに左千夫先生にお目にかゝつた。それから、齋藤茂吉君と最も親しくなつた。齋藤君とはその頃は、大抵一週間に一度や二度逢うた。逢へば必ず二人で歌を作つた。そして左千夫先生に見て貰つた。先生

はいつもあまり探つてくれなかつた。實際その時分の吾々二人の歌はよくなかつた。それでも先生は熱心に見てくれた。先生はわたくしたちが作るよりも一層骨を折つて見てくれたやうに思ふ。その年の十月わたくしは左千夫先生と共に信州へ旅行して、富士見高原、諏訪湖、蓼科の巖温泉等に遊んだ。その旅行で島木赤彦・篠原志都兒・望月光・湯本禿山の諸君にはじめて逢うた。信州から歸京すると、上總の炭眞氏の許で發行した「アララギ」の創刊號がとゞいて居た。その翌年明治四十二年の九月から「アララギ」は東京で發行することになつた。わたくしはその八月「アララギ」へ出す歌を作つてしまふと再び信州へ旅行した。赤彦君や堀内卓君たちと木崎湖から青木湖に遊び、歸途ひとり甲州の御嶽に遊んだ。

思へばこゝに擧げた人々のうち既に亡くなつたものが多い。そして左千夫先生と炭眞氏と湯本氏とは共に五十歳前後の年を享けたが、あとは堀内君でも望月君でも篠原君でも餘りに若くして死んだ。長塚さんでさへも今のわたくしよりは三つも若くて亡くなつた。今わたくしも癒えがたき病をいだいて居る。故人多きを思ふこと切である。

「屋上の土」の終りごろ即ち明治四十四五年ごろから齋藤君の歌はいちぢるく光つて來た。わたくしは相變らず愚圖々々して居た。

齋藤茂吉・島木赤彦・中村憲吉の三君と、わたくしとが初めて歌集出版のことを思ひ立つたのは随分古いことである。初めは四人合著のつもり

であつたが、赤彦君のと憲吉君のとが先づまとまつたので、兩君のだけを先に出すことになつた。アララギ叢書第一篇「馬鈴薯の花」がそれである。「馬鈴薯の花」が出版になつたその月、大正二年七月三十日にわたくしたちの師左千夫先生にはかに亡くなられた。先生の急死に愕くと共にやがて感奮した齋藤君はその年十月歌集「赤光」を刊行した。わたくしの歌集もつゞいて出る筈であつたが、言語道斷、懶惰なわたくしは今に到るまでつひに發行しなかつたのである。わたくしはこのことを思ふ毎にただ流汗慙愧するばかりである。發行にならぬ歌集のためにひた呆れにあきれながらも永い間なほ歌集のことである。と心配してくれた多くの人々に對しては何ともお詫びの申しやうもない。書肆東雲堂主人


である友人西村陽吉君にも多くの迷惑をかけた。

わたくしはこの選集「川のほとり」を編むために二十餘年間の自分の作歌を一通り見た。自分の歌は自分が常に思つて居たよりも、今度病床でこの選集の目安を作りながら思つたよりも、實際見て見ると甚だ拙いものであることをつくづく思はせられた。わたくしはたゞ恥づる。しかし、もう少しまとまつた歌集を近く出したいといふ心は前よりも一層切なものである。歌集出版のことをあらかじめ言ふのはわたくしとしてまことに面はゆいことではある。

昨年四月雑誌「日光」が出ることになり、わたくしは「日光」の同人となつた。

「日光」は現在の會員組織の短歌雑誌と對立的なものではなく、全く別の趣旨を主としたもので、廣い自由な雑誌である。「アララギ」はその創刊當時から永い間わたくしには最も因縁の深いものである。「日光」の同人となつたことが「アララギ」に對する友誼を絶つたのでもなく、手を分つたのではないことをわたくしは思つて居た。これがため「アララギ」と疎くなつたことはわたくしとして感慨が深い。わたくしは多年「アララギ」同人から多くの刺戟を受け影響を蒙つて居る。自分は「アララギ」及び其同人に對する敬愛と感謝との心を失ひたくないと思ふ。しかし、歌の道は結局は一人の道である。わたくしは病軀を護りつゝ、靜かに歩いて行かう。

大正十四年四月八日記。

發 兌		大正十四年五月一日印刷 大正十四年五月五日發行							
	<table border="0"> <tr> <td style="text-align: right;">著者</td> <td>古 泉 千 樫</td> </tr> <tr> <td style="text-align: right;">發行者</td> <td>山 本 美</td> </tr> <tr> <td style="text-align: right;">印刷者</td> <td>石 川 金 太 郎</td> </tr> </table>	著者	古 泉 千 樫	發行者	山 本 美	印刷者	石 川 金 太 郎	<table border="0"> <tr> <td style="text-align: right;">東京市芝區愛宕下町一丁目一番地</td> <td>東京市芝區愛宕下町一丁目十二番地</td> </tr> </table>	東京市芝區愛宕下町一丁目一番地
著者	古 泉 千 樫								
發行者	山 本 美								
印刷者	石 川 金 太 郎								
東京市芝區愛宕下町一丁目一番地	東京市芝區愛宕下町一丁目十二番地								

川のほとり

定價 四八拾錢

改 造 社

東京市芝區愛宕下町一丁目一番地
 電話 高輪 四九〇三番

株式會社秀英印刷所

集		歌		選		自	
木下利玄著	折口信夫著	中村憲吉著	古泉千桎著	島木赤彦著	齋藤茂吉著		
立	海やまのあひだ	松の芽	川のほとり	十	朝の螢		
春				年			
送料	定価	送料	定価	送料	定価	送料	定価
・二六	一・八〇	・二六	一・八〇	・二六	一・五〇	・二六	一・五〇

大坪書店
市 吳厝町